

きすな 2017

上川管内公立小中学校事務職員協議会
 発行者 広報担当 柳原 拓也（富良野・東小）
 第5号 2017, 10, 30

10月も残り1日となり、色とりどりに色づいた街中の木々の葉も残り少なくなった今日この頃。みなさんの学校では、予算要望や学校行事も一段落した頃ではないでしょうか。

さて、今回の「きすな」は、9月14日・15日に洞爺湖温泉を会場におこなわれた第67回北海道公立小中学校事務研究大会に発表者として参加した本郷さんをはじめ、参加された方から各分科会の感想をいただきましたのでご覧ください。



第3分科会発表者報告

名寄市立名寄西小学校 本郷 肇

おおよそ1年半の期間でまとめた名寄ブロックの問題提起では、内容が分科会討議の中心となる「学校づくり」にかかわることが全体を通してふれられているレポートに仕上げることができました。準備をしていくなかで、上事協で提起されている検討課題とブロックの研修を関連づけていくことが今までの研修の流れからは当初は考えられなかったことだったのですが、少しずつ検討課題が浸透していくように4年くらい前からブロック研修のなかで取り扱われるように提起されていたことが今回のレポート作成の出発点だったのだと思います。当時のブロック長の先見の明に敬服いたします。

内容については実践レポート集になっているのですが教育環境整備のとりくみについて、名寄ブロックの会員が研修を深め実践し、レポートとして研修会へ持ってきてくれたものを取り入れさせていただきました。研修課題に向き合いレポート作成に取り組んでくれた会員にあらためて感謝いたします。

そして、完成まで知恵を振り絞り意見を交わし合い、数回の検討委員会と度重なるメールや電話でのやりと



りを通して、苦心の上まとめることができました。

最初は暗雲がちこめていて、気が遠くなり、眠れない日もありましたが、「神は乗り越えられない試練は与えない」という言葉を信じ、管内研ではインフルエンザにやられながらも何とか全道研で発表することができました。

これも最後まであきらめずに発表者である私を支え続けてくれた名寄ブロックの会員をはじめとした上事協の皆様のおかげと思います。1年以上にわたり、何かと心配やら迷惑をかけ続けてきましたが無事終了できました。

ありがとうございました。



第3分科会司会者報告

名寄市立名寄東小学校 前畑 孝明

第3分科会司会者として参加しました。事前に、もう一人の司会者や助言者と連絡を取りながら、討議の柱を設定させてもらいました。助言者からは、「この分科会テーマの『学校づくり』は難しいよ。」と言われておりました。「学校づくり」は、幅が広くどんなことでも学校づくりにつながる反面、分科会の討議としては、的が絞りづらいとの指摘を受けておりました。当日は、職員

向け事務だより・保護者向け事務だより・教職員や保護者、地域とのつながり・学校間連携・世代間の継承との内容で、進めさせてもらいました。分科会最後には、助言者からホワイトボードを使い、「教育的視点を考えながら実践をしていこう。それが『学校づくり』につながります。」との話をいただきました。上川支部からの参加者をはじめ、網走支部（もう一人の司会者の支部）や後志支部の方からの積極的な発言があり、司会者として、大変うれしく思いましたし、大変助かりました。この分科会は、3本のレポート発表があり、分科会テーマに一番合致していたのは、上川支部名寄ブロックのレポートだと思います。上川支部の研修、そして、名寄ブロックの研修の方向性が間違っていないことを確認できた全道事務研だったと思います。



司会の前畑さん

講演会報告

富良野市立富良野小学校 小林 篤史

毎年全道研と言えば、雨、嵐、時々台風、稀に洪水、のように、天気が悪い、悪いどころか荒れる、というイメージでしたが、今年は天気に恵まれ、穏やかに雄大な洞爺湖を望むことができました。天気に恵まれましたが、開会式開始直前に一文字が半分剥がれるというアクシデントがあり、やっぱり荒れるのかな？と予感させる幕開けでしたが、きっとどの分散会も荒れずに穏やかだったかと思います。

大会前日から洞爺湖入りし、名寄ブロックの本郷さん、前畑さんの激励に力を入れ過ぎたのかどうかの記憶は定かでないのですが、1日目の体調がすぐれず、開会式での洞爺湖町長のジオパークについての丁寧な説明を真剣に聞いたためか、肝心の講演時には集中力を多少欠いていたので、メモ等は取れなかったのですが、頭の中の記憶を辿り、講演について書きましたの

で一読ください。

講演者は、朝日新聞東京本社科学医療部の錦光山雅子（きんこうざん まさこ）さんで、演題は、「制服・学校集金（保護者負担金）へのまなざし～2106年度朝日新聞制服価格調査報道から～」でした。錦光山さんは、2014年9月に千葉県の子家庭で起きた、母親がひとり娘を殺害した事件をきっかけに制服価格を調べることとなりました。その母親は、家賃滞納で強制退去が決定することが殺害のきっかけですが、そもそも家賃滞納のきっかけが、制服代など、入学準備にお金が必要となり、ヤミ金融から借り入れ、返済不能になったことでした。錦光山さんから低所得子育て世帯の課題として、**●収入の問題**～収入に波がある、**●支出の問題**～義務教育の私費負担が馬鹿にならない値段設定・市価より割高設定で決定過程の透明性の不足、**●タイミングの問題**～集金・支払いのタイミングと手当・給与の支給日がリンクしていない、が示されました。

収入の波とは、公的手当（児童扶養手当・児童手当等）が毎月ではなく、まとめて支給されるため、月ごとに収入の波ができることです。低所得世帯とは別の話になりますが、本校でも給食費の長期未納家庭は、児童手当支給月にまとめて納入する傾向があります。

私費負担の値段設定では、制服を例に問題提起されました。校章がついているがために、取扱い店でしか購入できない。標準型ならネットで格安に購入可能。標準型だったのが新制服に変更され、取扱い店でしか購入できなくなった。業者がいつも同じで値段の見直しもなく、競争している様子もない。などが保護者からの問題提起として紹介されました。タイミングの問題は、まさしくその通りです。

制服について、複数のメーカーが値段をすり合わせているのでは？や、自治体の私費の世界にはノータッチという介入不足の問題、学校側の専門知識不足の問題が関係していると投げかけられました。

制服の妥当な値段を模索する事例として、**市内6中学校でデザイン統一**、**5年ごとに業者の見直し**、**上下一式で0万円以内などの条件を付ける**などの自治体のとりくみが紹介されました。また、来年度からできる実質値下げ案として、**シャツなどの指定を解除**、**靴やシャツはデザイン・色指定のみにする**、**無用な刺繍・学年別の色指定をやめる**、**学校からのアンケートに制服の価格改善案を提案**し続ける、があげられました。

今回の講演は、身近な制服から保護者負担について、色々と考えるきっかけを与えていただいたと思います。「決まりですから」と進んでいくのではなく、見直せるところは見直すべきという問題意識を持つこと、情報を外へ発信していくことなどの大切さを感じ取ることができました。錦光山さんが助言者を務めた第2分科会に1日目のみ参加しました。正直PFシートが全道で広まっているという感じではありませんでした。最後に錦光山さんが、今修学旅行について興味を持っていますと発言されていました。制服と合わせ、修学旅行も実施が当たり前ではなく、保護者負担という視点（教員の負担軽減という視点からも？）で見直しを図る時期に来ているのかな？とも感じました。保護者負担について、色々と考えることができた講演でした。

幌加内中・原田さんからの情報で、錦光山さんを検索すると、今回の講演内容とほぼ同じパワーポイントにたどり着けるようです。参加されていない方で興味を持った方は検索してみてください。講演の冒頭、錦光山さんのパワーポイントが反応せず、結構な時間画面なしで講演が進みました。やはりこれから全道研が荒れることを意味しているのか…と思わせられましたが、決して荒れることなく、穏やかに終了し、帰路に着きました。研究発表された、名寄ブロック皆さん、特に本郷さん、前畑さん、吉田さん、大変お疲れ様でした。



第1分科会報告

美瑛町立美瑛中学校 坂本 典之

第1分科会「学校財政財務活動の具体的展開」

1 財政財務活動における備品整備計画および活用について

(1) 校内での予算執行と課題

予算の計画的執行という観点で話がすすめられました。若い人たちが予算執行に関わって困っていることを中心に話がされました。年度末に予算が大幅に残が出て困ったこと、要望が多く出されたときにどのように対処していくのか？などの話が出されていました。

(2) 年度末反省の現状と課題

「授業時数の確保から、職員会議の時間も十分ではなく、事務部だけではなく全般に渡って年度末反省の論議が深まらない。」「事務部は朝の打ち合わせに回されている。」という課題が述べられる一方で、「予算の総括の話をし、具体的な数字を挙げて関心をもってもらうようにしている。」「課題を明確にし、ポイントを絞って話している。」「学校事務に対する評価項目がないので、評価項目を検討する機会を活用していきたい。」「職員会議資料は事前提出が徹底されていて、事前に目を通すことができ会議の時短につながっている。」「評価や反省など、字として残るとやらなければならないプレッシャーがある。」などの前向きな意見があり、特に若い方々には参考になっているようでした。

(3) 予算要望活動の現状と課題

最初に発言した人の話を取り上げたため、予算要望のシステムがないところの交流となりました。「大枠予算で配分されており、消耗品費などの経常経費がかさむと、備品を購入できなくなってしまう。」「比較的大きな自治体で、予算を一定程度確保するために、教育委員会と話をし、学校予算の算定に関する基準を設けた。」などの意見が出されていましたが、意見が少なく、盛り上がりませんでした。

(4) 組織的な活動について

各市町村の組織的な活動について報告されました。

- ・森町は協議会組織を活用し、町教委と年1回意見交換会を行っている。就学援助申請書の「民生委員の意見欄」の廃止などの成果があった。

- ・新ひだか町では年度途中で10%予算がカットされた。町研サークルの中で意見交流しながら、対応することができた。

- ・石狩市では学校間連携会議の中で配分予算の調整を行っている。不要な印刷費をカットし、備品費に回すなど、「節」を越えた流用なども可能となっている。

- ・上富良野町学校事務連携会議では、保護者負担解消のとりくみを継続して行っている。昨年1年間の予算要望としての成果では、算数セットの公費化、ミシンのメンテナンス料の予算化があった。

＜助言者まとめ＞

予算執行や予算要望の優先順位をどうしたら？という話がありました。特にこれからの若い方へ向けた話ですが、備品や施設設備など、授業を見たり、破損の現場を見たり、安全点検の結果を見たり、教職員や児童生徒の話を聞いたりなど、判断できる材料はたくさんあります。机にかじりついて仕事をするだけでなく、いろいろなところへ足を運んで仕事をすすめていくことが大切です。

評価項目については、是非検討時の意見反映ができる機会を生かしてください。次の年の学校事務運営計画へどう反映させられるか？とても大事なことだと思います。

予算要望のない市町村の話が出ていました。旭川市については、一定の基準を設けてそれに従って配分が行われています。予算要望のシステムがないということで、一見マイナス的なイメージを持ちますが、あれは当時旭川市にいた先輩方の予算減に対する取組の一つの成果でした。予算要望のシステムがある自治体にあっては、その自治体の中長期計画などもしっかりと見ながら予算要望へ生かす工夫が大切です。

最近、子ども支援事業が盛んに行われています。新入学用品費補助、給食費や修学旅行費の無

償化など、しかし、その一方で支援事業での予算増が配当予算へ影響を及ぼしていないかをしっかりとチェックする必要があります。

若い方へ北海道の学校事務をどう伝えていくかは、引き続き大きな課題であります。周辺校によるバックアップ、学校間連携などを活用してください。学校の財政財務活動はサイクル化を定着させ、子どもたちのためによりよい教育環境を整備していくことが大事です。

2 備品についての現状と具体的な実践

(1) 備品要求活動の現状と課題

最初に経験年数の少ない方から困っていることが話されました。「備品の要望がなかなか出てこないことに対する対策は？」「要望の優先順位をどうつけたら？」「締め切りを守らせるには？」というようなことがありました。

それに対して、「教材整備指針を調べ、それに基づいて職員へ声かけを行っている。」「備品選定委員会があり、各教科代表が集まりその中で協議によってすすめられている。」「締め切りを2段階にしている。」「予算要望、5年程度の中期計画を立てている。」「グループウェア上で書き込み式にして、意見集約の途中経過もみんなに見える形で行っている。」「教務と協議して要望書を作った。」という話がありました。普段からコミュニケーションをとりやすい環境を作ることにより、それぞれが持つ思いを聞き、それを業務に生かしていくことが大切だということでもまとめられました。

(2) 台帳の整理と点検

台帳の整備全般について意見交流されました。「備品とする金額が2万円から5万円に変更された。5万円以下の備品的消耗品についてはテブラで独自シールを作り、管理している。」「備品台帳は紙ベースだが、エクセルでも整備している。写真や場所のリンクを貼り付けて工夫した一覧表で管理している。」「小中一貫校への変わり目の機会に大規模に整備を行った。エクセルを利用して台帳を整備している。」というような意見が出されていました。意見を聞いて、それらの取組を学校個別で行っているのかな？という印象を受けました。上川では台帳の関係は市町村単

位で動くことが多いと思いますが、全道的にはまだまだそうならないところもあるのだろうと感じました。

<まとめ>

備品の購入や要望については、さまざまな課題をもちながら業務を進めていると思います。要望時期と購入時期のタイムラグ、人事異動で人が入れ替わることにより、備品要望を経て予算が付いたのに、購入段階ではそれが不要とされるなど。職員会議などでの議論を経て職員間で共通理解を図りながら進めるとともに、子どもアンケートなどからの情報も生かしていくことが大切です。ICTなどの整備は、国の補助の状況に依るところも大きいです。国の整備計画などを要望活動に生かすべきだと思います。また、備品にかかわらず予算要望活動は年間を通じた活動としたいですね。行事の反省や学期ごとの反省などさまざまな機会を活用して、学校の課題を把握していきましょう。また、よく「教育委員会が買ってくれないから」という話を聞きます。しかし、教育委員会は敵ではありません。一緒になって財政サイドへ要望を訴えるため、課題を共有することが大切です。そのためには、普段からの関係づくりも大切になってきます。

台帳については、自治体単位の中でとりくみを行う必要があります。校内においては点検活動も大切にしたいですね。新たな発見につながる機会となります。

3 今後の財政財務活動の展開

今後の財政財務活動ということで自由に意見が述べられました。「財政財務活動という言葉は最初は理解できなかったが、研修会などを通じて少しずつわかってきた。」「私たちの仕事にとってコミュニケーションは欠くことのできないものです。職員に対して平等にコミュニケーションを取ることを心がけたい。」「財政財務活動を行う上で、学校間連携はとても大切な取組です。教育委員会との連携も大事です。まだ行っていないところは是非。」というような意見が出されました。

<まとめ>

学校事務を取り巻く状況やこれまでの北海道の学校事務のことを考えると、これまで以上に研修の場が大切になってきます。学校現場にいて子どもたちのために仕事をしているという自負を持ってしっかり仕事をしていきたいと思えます。

67回続いている意義を見つめ直す時期に来ていると感じます。これまで、私たちはその時々の課題に応じてみんなで話し合い知恵を出し合い、どうしたらよいかと考えを巡らせ、話し合いながらすすめてきました。改めて集まることの大切さを感じています。子どもをどう育てるかという視点を忘れずに仕事をしていきたいですね。

「子どもたちに目を向ける。」ようやく本州でもそんな話が出てきました。この4月に、私たちを取り巻く制度の大きな変化がありました。制度は強制力が働きます。北海道の学校事務をどう重ねていくか?ということをしっかり議論していきたいですね。

<感想>

全ての柱に共通して、経験年数の少ない方の疑問や困っていることを出してもらい、それに対して経験のある方々が答えていくというような流れですすめられました。参加者の状況を見ての司会者の判断だったと思いますが、議論の深まりという点においては十分ではなかったように思います。しかし、「67回続いている意義を見つめ直す。」「これまで以上に研修の場が必要になる。」「集まることの大切さを感じている。」など、これからの人たちへ響く(だろう)言葉があったことがよかったように感じました。



第1分科会の様子

第5分科会報告

富良野市立樹海中学校 山本 孝暢

この分科会は本部所管分科会で職務検討委員会が担っていました。未来へつなぐ北海道の学校事務～共に考えよう「チームとしての学校」から見える未来を～がテーマで、協力者に学校事務誌の木村編集長、元本協議会会長で兵庫教育大学大学院院生の名達和俊さんのコラボがあるということで参加しました。パネルディスカッション等で、中教審答申・タスクフォース・共同学校事務室・CS・・・と盛り沢山の内容から、どのような学校事務が語られ、つながっていくのかがとても楽しみでした。これが参加の動機です。

2日間の内容を、少しはメモしながら聞いていたのですが・・・以下、簡単な報告で申し訳ない。

1日目は、全事研京都大会の還流報告。次に、職務検討委員会の皆さんが、最近の学校及び学校事務職員を取り巻く社会情勢の説明と分析。詳しくは大会要項に掲載。また、文科省、中教審答申、職務検討委員会答申など29頁の資料が配布されています。

2日目は、ワールド・カフェとまとめ。ここでは、以前交流があった新採用の方々（現在は2校目の学校に勤務）や今年の新採用で頑張っている方と席が一緒になり、学校事務の仕事の枠組について楽しくおしゃべりができました。以下、メモ中から協力者のお二人の2日間のまとめで、私の報告もまとめさせていただきます。

木村編集長さん

本分科会は、一人ひとりの意見交流があり、学校事務職員として素晴らしい場、自分の仕事を振り返るとても良い機会と思う。学校事務誌は、日本の公教育に資する本を目指している。皆さんがこのような研修で教育に携わっている熱意を感じます。そして、当たり前のことだが「子ども」が出てくる研修会であることが素晴らしいワールド・カフェでは、皆さんのチームワークの良さを感じましたし、いろいろな方と交流することで刺激を受け、これからは現場では一人であるが、交流を持ちそれぞれの学校で活躍して欲しい。皆さんは、事務職員、事務のエキスパート。未来も大事だが日々の事務処理もさらにパワーアップを。学校に求められるものも変わってきている、事務職員も変わっ

ていく、そういうことを思いながら毎日の仕事を大切にこれからは、こういう仕事をしていきたいと目標を持ち、どのような職にしていくのも皆さんの仕事。学校事務誌も、ぜひ、お手伝いしたい。

名達さん

参加されている方は、良い雰囲気です。いろいろなカテゴリーの中で会話している。そこはある程度共通しているので、方向も決まっている。次は、制度を使って「なに」をやり、どのようにしていくのか。現実としては処理もしなければならないが、日本の公教育に資することを、どうとらえるのか、一人ひとりが考えを持って欲しい。こういうベースがあるから、こういう教育が必要だ。学校の中で、皆で話し合う、この話し合いの中で公教育の姿が見えてくる「チーム学校」「つかさどる」は、明日を、未来を考えたときに、一つの考え方として校務分掌(業務)に返っていくのでは、二本立ての片側に入っていく。職務標準的なイメージで分け、可視化していくこれからは学校事務職員一人ひとりではできない、校長も巻き込んで、教育行政を繋いでいく。管理職、職場の仲間で「自己変革」しなければ「つかさどる」にはならない。

以上、参加しての簡単な報告とさせていただきます。

おまけ

ぜひ、「つかさどる」と変わったいまこそ、北海道の学校事務-第2集-をご一読いただきたい！ とくに、持田栄一氏に学ぶの29頁、学校事務とは何か-「教育としての学校事務」論の再構築-を読んで欲しい。なお、第2集は、全道協議会HP北海道の学校事務から読むことができます。

◎「教育事務」は、教育にまつわる「データと情報の処理」を意味し、そのような「教育事務」のうち、学校におけるものがすなわち「学校事務」だということになる。

◎「事務」はすぐれて人間的なものであり、本来血の通ったものであるべきものである。





ワールド・カフェで使用したふせんの数々



第4分科会の様子



第5分科会の様子



おまけ



全体会の様子



第2分科会の様子

今回の全道事務研は、上事協からの37名を含む430名を超える参加のもと開催されました。

それぞれの分科会で学んだことを各市町村・ブロックで交流していただき、それぞれの教育環境整備を一層前進させる糧としていただきたいと思います。

さて、2019年度の第69回全道事務研は、上事協が主管支部となってライフオート札幌にて開催されます。椎名実行委員長を中心に、上事協会員一丸となって大会が成功裏に終わるように準備を進めていきたいと思ひます。会員一人ひとりのご協力をよろしくお願いいたします。